



## キリスト教と仙台藩

伊達政宗は慶長15年(1610)、側室の病氣療養をきっかけにイスパニア(スペイン)の宣教師、ルイス・ソテロと出会います。ソテロの紹介でブルギオという医師が治療にあたり全快したことから政宗はソテロを厚遇し、政宗庇護下でソテロは布教活動を行いました。

政宗はキリスト教に好意的で、洗礼は受けなかったものの仙台城の城門と本丸大広間には「キリシタン布教及び信教勝手たるべき」という掲示を行うほどでした。この政宗とソテロの取次役を担ったのが、キリシタン武士で上胆沢郡見分村(福原)を領知していた後藤寿庵でした。

元和3年(1617)の記録では、仙台藩領内には教会7カ所、信徒750人余がいたとされています。

徳川家康はキリスト教を禁じていても、貿易は奨励していました。特にルソン(フィリピン)やノビスパニア(メキシコ)との貿易には熱心で、家康は世界屈指の金の産出国であるノビスパニアからその加工技術を取り入れたいと考えていたようです。しかし、当時のノビスパニアはイスパニア(スペイン)の支配下にあり、イスパニアとの交渉のため家康は慶長18年(1613)までキリシタン宣教師を追放しませんでした。

その頃、スペイン船が房総半島で座礁。フィリピン臨時総督だったドン・ロドリゴが救助され、ロドリゴが家康に謁見の際に通訳を務めたのがソテロでした。

ロドリゴが無事イスパニアに帰り、家康への返礼のため答礼使としてセバスチャン・ビスカイノを日本に派遣しました。

慶長16年(1611)、ビスカイノが仙台を訪れます。目的は東日本に「金銀島」という金や銀を大量に産出する島があると信じていたため、それを探し当てようというものでした。そのため目的は伏せていましたが、家康や政宗から太平洋沿岸の測量や探検の許可を得ています。ビスカイノは仙台、松島、瑞巖寺を見て、船

で石巻を調べ、月の浦を「サン・フェリベ」、女川を「サン・アントン」、雄勝を「レムス」、気仙沼を「サン・カタリナ」と名づけています。

この頃の幕府はオランダとの交易を深めており、イスパニアとの交渉意欲は薄れていました。そこで政宗は幕府の許可を得て仙台藩独自で遣欧使節を派遣することを画策し、桃生郡十五浜村<sup>ものう じゅうごほま くれつば</sup> 壺堂(雄勝町)で5か月間かけてガレオン船「サン・ファン・パウティスタ号」を建造。慶長18年(1613)10月、支倉常長<sup>はせくらつねなが</sup>を正使とした仙台藩士ほか、イスパニア答礼使のビスカイノ、宣教師ソテロら総勢180人が乗船し<sup>おししか</sup> 牡鹿郡の月の浦(石巻)を出航しました。



サン・ファン・パウティスタ号

常長はイスパニア国王やローマ法王との謁見を果たしますが、この時すでに日本国内ではキリスト教の弾圧が始まっており、交渉は成立せず元和6年(1620)の帰国時には禁教令が出されていました。

政宗も幕命に従い領内のキリシタンを取締り、改宗に応じない信者を厳しく処罰。政宗とソテロを取り次いだ後藤寿庵もまた熱心なキリシタン信者で、知行地の水沢福原を拠点に布教を行っていましたが捕縛の手が差し向けられると消息を絶ち、活動を共にしていたポルトガル人宣教師カルバリヨら信徒たちは殉教<sup>じゆんきやう</sup>。仙台藩のキリシタン弾圧は明歴(1655～57)頃まで続きました。

## キリスト教と江刺地方

キリスト教の新たな黎明期は、禁教令から解放された明治6年(1873)に訪れます。

世の中の空気が一変し、宗派を問わない信仰の自由が確立され、岩手では盛岡を中心に巡回伝道が行われ、江刺地方でも主にハリストス正教会とカトリック教会による二教派の布教が行われました。

布教の拠点となったのは人首町<sup>ひとくまべ</sup>で、土佐藩士の沢辺琢磨<sup>たくま</sup>がハリストス正教会の教えをもたらしたことが端緒とも伝えられています。

沢辺は文久元年(1861)に来日したハリストス正教会の修道士、ニコライの殺害を図り、箱館へと渡りますが、逆にニコライの教えに感化し、弟子になった人物。戊辰戦争の最中、沢辺は気仙沼で仙台藩に捕縛され、箱館への護送途中に人首御番所で役人に正教会の教理を伝えたとされます。

明治11年(1876)頃から布教が本格化し信者数も増加。修道司祭ニコライによる巡教もあり、人首町は正教会の伝道拠点としての役割を担うようになります。また、内陸と沿岸部とを結ぶ立地から、宿場町として発展した人首町はカトリック教会も浸透しており、明治17年(1884)には岩手県内に2番目となる聖堂も建設されました。



人首正教会(昭和初期)

岩谷堂でも和賀郡田瀬村の豪農、菅谷政蔵が陶商の有志を誘って明治11年(1878)から正教の研究に努め、ニコライに布教師の派遣を求めています。それに応じ、岩谷堂には多くの伝道者が訪れて信者数も拡大。その中には「中善観音」を所蔵する小原善次郎の姿もありました。

善次郎は教会の資金やイコノスタス設置のため、足しげく東京神田の日本正教会を訪れ協力を求め、その結果、大正3年(1914)に岩谷堂正教会の聖堂建設が実現。

また、同時期の岩谷堂にはプロテスタントによる「岩谷堂バプテスト教会」も設立されています。

江刺地方の人々は、仏教や神道、修験道など様々な信仰を持っていました。そこに近代以降はキリスト教が加わる形となりましたが、それぞれの教派・宗派は争うことなく共存してきました。その一例が神棚や仏壇の扱いなどにみられます。

偶像崇拜を禁ずるキリスト教において、江刺地方ではカトリックでは仏壇に十字架を吊るし、ハリストス正教会では聖名、聖人、亡くなった家族の写真を飾るなどに利用してきました。このように、従来の信仰の諸物に新しい思想を取り入れながら生活の中に順応させていくという風潮から、江刺地方の人々の特性や地域性が示されているように思われます。

## 基督正教会(ハリストス正教会)

正教会はロシア正教あるいは東方正教会とも呼ばれるキリスト教の教会(教派)の一つで、同じ信仰を有しながら国名もしくは地域名を冠した組織を各地に形成するのが基本となっています。

日本へは江戸時代末期から明治にかけて箱館のロシア領事館で附属禮拜堂司祭を務めた修道司祭ニコライ(のちに初代日本大主教)によって正教がもたらされ、これがその後の日本ハリストス正教会の設立に結びつきました。

日本初の信者は、のちに最初の日本人司祭となる土佐藩出身の沢辺琢磨らで、沢辺は当初「異国の邪教を広める者を斬る」目的でニコライのもとを訪れますが、ニコライの説諭を聞き、正教の教えを受けるに及んで信者となりました。この経緯を使徒パウエル(パウロ)になぞらえて、沢辺に対しニコライは「パウエル」の聖名を与えています。

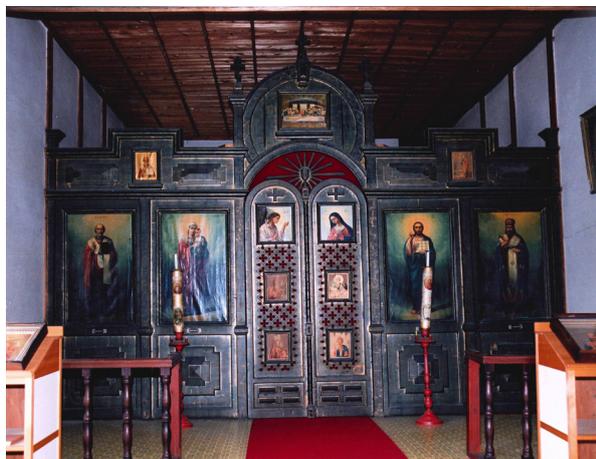
明治元年(1868)、沢辺は東北地方を南下しながら布教活動を試みるも、気仙沼で捕縛。箱館に護送される途中、江刺郡人首村の番所で所持品の検査をした役

人が、正教の教理書を見て密かに沢辺のもとを訪れたのが、江刺地方における正教が説かれた最初とされています。その後、人首正教会が設立され、明治23年(1890)には教会堂が完成。同26年には東北巡教に際しニコライ主教が人首を訪れています。

岩谷堂正教会は明治11年(1878)、町内の有志による招きで東京よりポーロ藤岡が来訪し、数ヶ月にわたり伝道したのを端緒に、次いで一関の水山高志司祭が布教活動を行い、翌年に佐藤養蔵、柏木久蔵、小原善次郎らが入信して設立されました。翌13年には新たに15名の入信者を得て、さらにその後も信者数は増加を辿りました。

この当時は司祭の住宅を教会堂として使用しており、信者らは教会堂新設を目指しますが、日清・日露戦争の勃発や資金難などから建設は難航し、大正2年(1913)に至って教会堂が完成。翌年の会堂聖成式には人首、水沢、前沢、一ノ関などからも信者が駆けつけ、盛大に落成を祝いました。

この教会堂建設には木炭販売などを営む中善商店の小原善次郎が尽力。会堂敷地および建物の建設資金をはじめ、会堂内の聖障(イコノスタス)の設置についても度々、東京ニコライ堂(東京復活大聖堂)を訪れては協力を求め実現に至ったとされます。



岩谷堂正教会のイコノスタス

その後、岩谷堂正教会は昭和59年(1984)に人首正教会と統合。同年の教会堂改修工事を経て、現在も信者による敬虔な祈りが捧げられています。

正教会の会堂内は至聖所を奉神礼執行の中心とし、聖所に参集する信者は至聖所と聖所を隔てる聖障(イコノスタス)に向かい拝礼します。

聖障は神と人との中保の働きを示し、その結合を象徴するものとされ、中央の王門(天門)を中心にハリストス(キリスト)、生神女マリヤ(マリア)、天使、聖徒などの聖像が飾られます。

岩谷堂正教会の聖障は旅順から招来したものと伝えられ、聖像の一枚には日露戦争の際の弾痕を修理した形跡もあるとされます。幅356cm、高さ468cmの規模を測り、全体に緑色の色調を呈する木製で、中央の頂部には石版画による「最後の晩餐」が飾られ、王門の上部にある2面の聖像は日本初の聖像画家、山下りんによるもの。王門の両側の生神女マリヤ、ハリストス、聖徒の聖像はロシア製です。



山下りんによる聖像画(石版画・岩谷堂正教会)

## 天主公教会(カトリック教会)

ローマ教皇を中心とするキリスト教の教派で、日本では戦国時代から江戸時代にかけての布教活動でも知られるイエズス会やフランシスコ会などの修道会も同教派に所属。その中心はローマの司教座に置かれています。

天文18年(1549)にフランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸し、カトリック教会は急速に普及しましたが、徳川幕府によるキリスト教禁教令は東北地方にも影響をおよぼしました。岩手県地方では大籠地区(一関藤沢)でのキリシタン弾圧や水沢福原の後藤寿庵の足跡などが知られています。

明治4年(1871)から日本での再布教を志して新潟や弘前を視察に訪れていたフランス人宣教師たちは、明治7年(1874)に秋田を経て岩手に来訪。盛岡を中心に布教活動を始めました。

明治10年(1877)、水沢の菊池文三郎がフランス人宣教師ベリオスの洗礼を受けて信者となり、その後、人首に入婿した縁で、人首町の住民数名もベリオスの洗礼により入信しました。以後も信者数が増えたことで人首は江刺地方における布教拠点となり、明治17年(1884)には岩手県内では盛岡に次いで2番目となる聖堂が建設されました。明治21年(1888)、のちの

カトリック東京大司教区の初代大司教となるオズーフ司教巡教の際には花火を打ち上げて来訪を歓迎したとされます。その後も明治37年(1904)に聖堂前に鐘塔が建てられ、フランス国製のアンジェラスの鐘が設置されるなど活動を伸張させ、岩谷堂にも伝道所を設置。昭和38年(1963)には自徳寺東南の高台に聖堂を望むように聖母マリア像が建立されました。



人首町のマリア像 昭和38年(1963)

## プロテスタント教会

プロテスタントは16世紀にヨーロッパで発生した宗教改革の影響により、カトリックから分離して誕生した教派。当時のヨーロッパ各地では教会の改革を求める運動が起こり、その指導者としてドイツのマルティン・ルターなどが知られています。したがって、プロテスタントはあくまで教義および実践に改革を導入したキリスト教諸教会の包括的総称であって、教皇やバチカンのような全体の指導者や統括組織・総本山といったものが存在しないのが特徴です。

日本では安政6年(1859)に米国聖公会から派遣され、長崎で英語教師として活動を行ったジョン・リギンズが最初のプロテスタント宣教師とされています。しかし、実際の源流としては、明治9年(1876)に熊本洋学校の教師ジェーンズの感化を受けた水沢出身の山崎為徳ら学生たちによる「熊本バンド」や明治11年(1878)に札幌農学校のクラーク教頭の感化によって洗礼を受けた新渡戸稲造らを中心とした「札幌バンド」。また、日本基督公会を設立した「横浜バンド」と呼ばれる各グループが日本プロテスタント史の発祥といわれています。特に熊本洋学校閉校後に受洗者の学生らは新島襄が設立した同志社英学校へと移り、同校はキリスト主義学校(ミッションスクール)の草分け的存在となりました。



山崎為徳

山崎為徳は明治12年(1879)、郷里の水沢で布教を行い同志社へ片桐清治を入学させますが、同14年に結核を患い24歳の若さで生涯を閉じます。

同志社を卒業した片桐は水沢での専任伝道師として着任。吉小路の内田家を仮講義所として布教を行い、斎藤陽之助、片桐英之助、下飯坂権三郎らが受洗者となりました。その後は講義所を斎藤陽之助宅に移転。名称も水沢基督教仮教会と改め、新島襄とともに来日し、仙台を拠点に伝道活動を行っていたアメリカ人宣教師、ジョン・デフォレストの支援を受けながら教線を伸長させました。

岩谷堂でのプロテスタントは当初、盛岡からの出張伝道でしたが、大正4年(1914)に関東学院の前身である日本バプテスト神学校卒業後の牧師、足達信三郎が盛岡浸礼教会のアメリカ人牧師で関東学院の創設にも関わったヘンリー・タッピングの支援のもと岩谷堂バプテスト教会を創立しました。

タッピングは牧師のかたわら盛岡中学で英語講師を勤めており、その当時、中学1年の宮沢賢治も在学していました。ほどなくしてタッピングは講師を辞しているため、ここでの賢治との接点は不明ですが、盛岡高等農林学校に進学した賢治はタッピングの聖書講座を受講しており、親しい間柄だったことが知られています。また、賢治は盛岡教会にあったオルガンを聴きに来たともいわれています。

賢治の文語詩『岩手公園』には、公園を散歩しているタッピング一家の様子が描かれており、童話『ビジテリアン大祭』には「祭司次長ウィリアム・タッピング」として登場しています。

なお、足達新三郎は結婚後、タッピング夫妻が盛岡幼稚園を設立したことに倣い、岩谷堂で最初となる岩谷堂幼稚園を創設。新三郎逝去後は運営が岩谷堂町へと移管されて今日に至っています。

ひとかべ

## 人首町と二つの教会

江刺地方の最も東端に位置する米里地区人首町には近世から存続する神道や仏教に加え、近代に伝道されたハリストス正教会（ロシア正教）とカトリック教会の二教派が共存しています。こうした地方の一地域に神道や仏教とは全く異なるキリスト教の二教派が出現することは他所に類例をみない現象であり、教会側からの働きかけや当時の時代背景等の理由の他に、人首の地域社会がキリスト教を受け入れやすい要因をもった地域性であることが考えられます。つまり、江戸時代から形成された城下町（正式には人首要害と付随する町場）としての存在、内陸部と沿岸部とを結ぶ宿場町として交易の中核を担う存在であったこと。そして鉱山の存在による外部からの流入等、常に他地域と比べて外部との交流接触が日常的にある環境であり、別の視点からいえば地理的・社会的に新しい事柄を受け入れやすい地域であったとも捉えることができます。

人首町でのキリスト教布教の端緒と伝えられるのが、土佐藩士の沢辺琢磨によるハリストス正教の伝道です。沢辺は当初「異国の邪教を広める者を斬る」目的で箱館ロシア領事館の司祭だったニコライのもとを訪れますが、ニコライの説諭を聞き、正教の教えを受けるに及んで日本人初となる正教信者となりました。ニコライはこの経緯を使徒パウエル（パウロ）になぞらえて、「パウエル」の聖名を沢辺に与えています。

明治元年（1868）、沢辺は東北地方を南下しながら布教活動を行いますが、明治政府の間者と疑われ気仙沼で捕縛。箱館に護送される途中、江刺郡人首村の番所で所持品の検査をした役人が、正教の教理書を見て密かに沢辺のもとを訪れたと伝えられています。その詳細は不明です。



人首町（昭和初期）

明確な記録としてハリストス正教会が人首町に伝道されたのは明治11年（1878）頃。大東大原の佐伯ペートルの取り成しにより、岩谷堂在住の副伝教師、山内

ヤコフらが布教を行ったところ、翌年には数名が洗礼を受けて入信したとされます。その後も入信者が増加したことで、明治14年（1881）に人首ハリストス正教会が創設され、明治23年（1890）には東京本会堂建築に従事した建築家を招いてビザンチン式4間×6間半、4層楼の教会堂が完成。同26年にはニコライ主教が東北巡教の途中、人首を訪れています。

明治37年（1904）に日露戦争が開戦すると、日露国交は断絶。正教徒が迫害を受ける騒ぎが東北各地で勃発します。次いで大正6年（1917）にロシア革命が起こると、以降はロシア正教会からの支援が途絶え、日本正教会は急速に衰え始めます。加えて昭和8年（1933）には人首町の大火により教会堂が全焼。同11年（1936）に再建されますが、同25年（1950）に再び焼失。昭和58年（1983）に人首正教会は岩谷堂正教会に統合しました。



人首聖堂とアンジェラスの鐘

カトリックの人首布教は明治10年（1877）でハリストスよりも2年早く、水沢でフランス人宣教師ベリオスの洗礼を受けて信者となった菊池文三郎が人首に入信した縁で、人首町の住民数名がベリオスより受洗し入信しました。また、教会堂建立もハリストスより6年早い明治17年（1884）で、岩手県でも盛岡に次いで2番目の早さです。この点でハリストス正教会も含めて、人首町は岩手県でも草創期のキリスト教布教地だったという特徴が顕著に表れています。

明治37年（1904）頃には教会前に鐘塔が建てられ、フランス国製のアンジェラスの鐘が設置されました。人首町ではこの鐘と自徳寺の梵鐘、役場（地区センター）のサイレンが同時に朝暮を告げ、地域特有の音風景にもなっています。



刺繍画 (スカプラリオ)

20世紀 レバノン

個人蔵

素朴な姿の聖母子の姿と七分袖の服を着た天使と十字架がいくつか刺繍され、周囲にはアラビア文字が記されています。

レバノン共和国は北と東がシリア、南が聖地の国イスラエル、そして西が地中海に面した小国で、国民の3～4割がキリスト教徒です。中東諸国の中で最もキリスト教徒が多く、大多数が4～5世紀に成立した「マロン派」に属しています。

マロン派はシリアの修道士、聖マロンを始祖とする東方典礼カトリック教会(東方教会の儀式を用いながら、カトリックの教義を受け入れている教派の総称。合同派)の一つ。度重なるイスラム王朝と十字軍との攻防の狭間で信仰の系譜を維持してきました。

キリスト教もイスラム教も根源は同じユダヤ教であり、レバノンのキリスト教徒は現在もイスラム教徒と共存し、アラブ系キリスト教徒は神のことを「アラー」と呼称しています。



聖像画(イコン) とりなしの聖母

1900年 ロシア

個人蔵

正教会は東方正教会とも呼ばれ、ローマ・カトリック教会やプロテスタント諸教会が西ヨーロッパを中心に広がったのに対し、イエス・キリストが生まれた中近東を中心に、ギリシアをはじめ、東欧からロシアへと広がった教派です。聖像(イコン)は、特に正教会において聖堂内や一般家庭に安置し礼拝の対象とする聖画像で、形状も板絵、フレスコ画、モザイク画など様々な種類があります。

『とりなしの聖母』は救いを求めるあらゆる人々に福音をもたらすマリアがイエスの前で「執り成す」姿を表現しています。

この構図はビザンティン美術において伝統的なものであり、9世紀頃には描かれはじめたともいわれています。マリアは神の光の象徴である金色に照らされて、自らの祈りが記されている巻物を手にしています。また、周囲にはキリスト降誕場面を含むマリアの叙事詩も表されています。



聖像画(イコン) 絶えざる御助けの聖母

19世紀 フランス

個人蔵

ビザンティン(東ローマ帝国)の聖像画における図像で、聖母子像に受難の道具を運ぶ天使ミカエルとガブリエルを加えたものです。

救いに至る道としてのイエスを示す「ホデーゲートリア(ギリシア語で「道案内をする女性」の意)の聖母像を発展させたもので、正教会においては聖母マリアの称号の一つである「受難のテオトコス(神の母)」と呼ばれています。また、扉絵には信仰を守護する聖ゲオルギオス(右)と聖エウスタキウス(左)の聖人像も配されています。



聖像画(イコン) 聖母子像

現代 ブルガリア

個人蔵



(表紙)



聖福音經 (聖書)

明治 38 年 (1905) 岩谷堂正教会

えさし郷土文化館 (小原善次郎旧蔵)



(裏表紙)



エチオピア正教会 聖書

18 世紀 エチオピア

個人蔵

イエス・キリストの生涯がエチオピア語で記されている  
犢皮紙 (ヴェラム。子牛皮) 製の聖書。手彩色の口絵 10 枚が  
描かれ、それぞれの題名が付されています。

エチオピア正教会はエチオピアで 4 世紀頃から独自に発展した  
キリスト教で、13～20 世紀まで存続したエチオピア帝国時代には  
国教とされてきました。教派は東方正教会に分類されていますが、  
『旧約聖書』に記されている「十戒」<sup>〔じっかい〕</sup>が刻まれた石板を  
収めたという「契約の箱」<sup>〔せいりつ〕</sup>を保持し、最も重要な  
聖遺物として崇敬する特徴的な習慣があります。



装丁 (木製)



### 十字架

19世紀 岩谷正教会  
えさし郷土文化館(小原善次郎旧蔵)



### 十字架

年代不詳  
個人蔵

イエス・キリストが磔刑に処された際の刑具と伝えられ、キリスト教において最も重要な象徴としています。日本ではポルトガル語の「Cruz(クルス)」の語感から「久留子」とも称していました。



(表)

(裏)

### メダイ 聖人像

19世紀 岩谷正教会  
えさし郷土文化館(小原善次郎旧蔵)

金属製の小型薄円形のもので、表裏面にキリスト、マリア、聖人、聖堂などキリスト教の象徴が刻まれているメダルです。受洗者が自らの信仰を高めるため、あるいは信仰を忘れないために身につけ、その多くは首からさげるために鎖やひもを通す穴がついているのが通例。大小も様々で、形状も円形、楕円形、四角、開閉式のものなど多種多様です。

メダイは古くから使用されており、巡礼が盛んに行われていた中世ヨーロッパなどでは巡礼地の教会で、記念として巡礼者に授与されていました。また、江戸時代初期には水沢福原の信者も身につけていました。

メダイの中でもよく知られているのは「不思議のメダイ」、「聖クリストファーのメダイ」、「聖ベネディクトのメダイ」などがあります。

### 【謝意】

本展の開催および本稿の執筆にあたっては、宮本升平氏から多大なる資料のご提供および種々のご教示・ご助言を賜りました。

記して深く感謝の意を表します。

### 引用・参考文献

- 江刺市史編纂委員会『江刺市史 第三巻 通史篇 近代・現代』1985年
- 水沢市史編纂委員会『水沢市史4 近代(Ⅰ)』1985年
- 安彦公一『寿庵の道』1993年
- 菊池力也『正教会関係記録』2000年
- えさし郷土文化館『江刺のふるさと再発見—米里編—』2008年
- えさし郷土文化館『江刺のふるさと再発見—岩谷堂編—』2015年
- 及川宏幸『岩手県江刺人首のキリスト教—新たな教会の成立と信者数の変遷から垣間見る時代背景—』2018年